

「愛がなければ」

(1コリント13:1-3)

挽地茂男

2019.3.24 日本基督教団千歳丘教会

本日からコリントの信徒への手紙一の13章、通称「愛の賛歌」(愛の章)と呼ばれる箇所を読みたいと思います。

今日も少し遠回りをしますので、その遠回りの道筋を最初にお知らせをしておきます。まず最初に瀬戸内寂聴さんの言葉、そして太宰治の言葉、そしてアンパンマン、ヨハネの言葉、そしてパウロの言葉に向かいます。

さて瀬戸内寂聴さんといえば、文筆家としてだけではなく、今や天台宗の僧侶として有名な方で、わかりやすい言葉で仏教を説き、人々の人生のさまざまな問題にアドバイスをおくるという働きをなさっています。寂聴(瀬戸内晴美)さんは、1973年に得度(出家)して仏門に入られるのですが、彼女は最初、修道女になろうとしたのです。し



かし教会から拒否されてしまいます。過去が問題にされたのです。彼女は、大学生の21歳の時(1943年、戦争の最中)に見合い結婚をして、翌年、女の子を出産しますが、夫の教え子と不倫のあげく3歳の娘と夫を残してその男性と逐電(駆け落ち)した過去の行状が問題にされたのでした。その後、仏道に入るべく出家を志して、多くの寺院を訪ねますが、やはり拒否されてしまいます。しかし1973年、今春聴(今東光)大僧正を師僧ほうみやうとして中尊寺にて天台宗で得度、法名を寂聴と名乗ることになります(戸籍上の氏名は、1987年に天台寺住職となった際に瀬戸内晴美から瀬戸内寂聴に改名)。翌(1974)年、比叡山で60日間の行を経て、京都嵯峨野で寂庵と名付けた庵に居住することになります。現在の僧位は、権大僧正〔天台宗13階級の上から2番目〕。なかなか偉い



方なのです。位も偉いかも知れませんが、わたしが寂聴さんが偉い方だな、と思うのは、世間で非難轟々のバッシングを受けて一定のマイナス評価が収まって、一種「鼻つまみ者」的存在と見られている人たちと接触を持ったり、雑誌の対談を組んだりなさることですね。たとえば連合赤軍のリーダーであった永田洋子元死刑囚〔脳腫瘍で獄死〕や、連続射殺事件の永山則夫元死刑囚〔すでに死刑執行〕や、近いところでは「STAP細胞騒動」の小保方晴子さんや相撲の元貴乃花親方などです。それぞれの人たちのもつ主張の擁護・弁護ということではなく、人が人であることの温もりを共に再発見する役割を果たすのです。

この瀬戸内晴美(寂聴)さんが出家をする2年前の1971年(49歳)に書かれた「愛は何度可能なのか」(『婦人公論』1971.7月号)という文章があります。得度(出家)され



る2年前なので、かなり行き詰まっている、という勝手な感想を持ってしまう文章ですが、お読みします。

「自立し、自分の仕事を持ち、自分の情熱の欲する時だけ、みたくしてくれる男を迎える生活、そしてもし、自分だけで育てられる自分の産んだ子供が一人か二人あれば、彼女は申し分ない人生を送っているといえる。

本当に解放された自由な女は、人間が決して、他からは充たされないこと、自分の愛などという力が他を決して充たしきりはしないことを識っている。

彼女にとっては、結婚という形態や家という外殻は何の必要もなくなっている。…

永遠の愛など決して存在しないことを知っているからこそ、今日、この瞬間の愛の大切さを一滴もこぼさず味わい尽くそうとする。

形式的な結婚など何度繰り返しても、そこから夫婦という名の男女の狎れあいのだましあいしか生まれ^なないことを知っている彼女は、決して今更結婚という形式の鎖につながれようとは考えない。」

瀬戸内晴美(寂聴)さんの——当時の——主張では、①「愛」が、も

っぱら男女間の情愛をあらわす言葉として使われています。②永遠の愛など決して存在しない、と言い切ります。むしろ③瞬間的な「愛」が存在する。この一期一会の瞬間の愛にこそ真実の愛があり、その愛の大切さを一滴もこぼさず味わい尽くすべきであって、だから④結婚や家といった安定装置を求めべきではない。結婚という制度や家によって守られる形式的な結婚からは夫婦という名の男女の狎れあいのだましあいしか生まれてこないのだ、と言います。そして⑤自立した自由な女は、あらゆる束縛から解放されていなければならぬ、ということになります。



後、太宰治の言葉に出会ったとき

しかしわたしにとって、「愛」をこのようにもっぱら男女間の情愛をあらわす言葉として、しかも定義もせずに、意味の明らかな自明の言葉として用いることが可能かという疑問がわいてきました。そしてその

に、目からうろこが落ちるような思いがいたしました。

太宰治——最も聖書を読んだ日本人作家と呼ばれることがある——に「チャンス」(季刊『芸術』創刊号, 1946.7) というエッセイがあります。このエッセイが季刊『芸術』創刊号に発表されたのが1946年7月、戦後まだ1年たたない頃です。その頃の「愛」という言葉に対する、太宰の感覚は大切だと思います。

「いったい日本において、この「愛」という字をやたらに何にでもくっつけて、そうしてそれをどこやら文化的なものみたいな概念にでっち上げる傾きがあるようで(そもそも私は「文化」という言葉がきれいである。



北村透谷



厨川白村(京大教授)

文のお化けという意味であろうか。昔の日本の本には、文華はまたは文花と書いてある)、恋と言ってもよさそうなのに、恋愛、という新語を発明し、恋愛至上主義〔北村透谷や厨川白村を指す発言

か) なんてのを大学の講壇で叫んで、時の文化的なる若い男女の共鳴を得たりしたようであったが、恋愛至上というからなんとなく高尚みたいに聞こえるので、これを在来の日本語で、色欲至上主義と



言ったら、どうであろうか。交合至上主義と言っても、意味は同じである。そんなに何も私を、にらむ事はないじゃない

か。恋愛女史よ。

つまり私は恋愛の「愛」の字、『性的愛』の「愛」の字が気がかりでならぬのである。「愛」の美名に依って、卑猥感を隠蔽せんとたくらんでいるのではなからうかとさえ思われるのである。

「愛」は困難な事業である。それは「神」にのみ特有の感情かもしれない。人間が人間を「愛する」というのは、なみなみならぬ事である。容易なわざではないのである。神の子は弟子たちに「七の七十倍ゆるせ」と教えた。しかし、私たちには、七度でさえ、どうであろうか。「愛する」という言葉を、気軽に使うのは、イヤミでし

かない。キザである。」

太宰の言葉、「愛」をもっぱら男女間の情愛をあらわす言葉として用いる文脈から引き離します。また「愛」という言葉が無定義のまま、いたずらに人の情緒だけを喚起するイメージ言語として使われることに太宰は反対します。何にでも「愛」をくっつける当時の風潮が気に入らないのです。だから①恋愛は新語だと言います。恋と言ってもよさそうなのに、「愛」という言葉をくっつけて「恋愛」という、どこやら文化的なものみたいな概念にでっち上げているだけで、その中身は、男が女に恋しそれを求め、女が男を恋しそれを求めているだけのことなのだ、なんとなく高尚に聞こえるが露骨に言えば色欲至上主義、交合至上主義と言っても差し支えない。そして太宰治は、ちまたに横行する「愛」の氾濫に逆らうように、聖書にその意味の基礎を求めます。「愛」は困難な事業である。この「愛」は「神」にのみ特有の感情かもしれない、と主張します。人間が分かった気になって「愛」だ「愛」だなどと言えるものではない。そんな「イヤミでキザ」な風潮に釘を刺します。

「アンパンマンのマーチ」

作詞 やなせたかし

作曲 三木たかし

そうだ！嬉しいんだ生きる喜び／
たとえ胸の傷が痛んでも

①何の為に生まれて 何をして生きるのか
／答えられないなんて そんなのは嫌だ！
今を生きることで 熱いところ燃える／
だから君は行くんだ微笑んで。

そうだ！嬉しいんだ生きる喜び／
たとえ胸の傷が痛んでも。

嗚呼アンパンマン優しい君は／
行け！皆の夢守る為

② 何が君の幸せ 何をして喜ぶ／
解らないまま終わる そんなのは嫌だ！
忘れないで夢を 零さないで涙／
だから君は飛ぶんだ何処までも
そうだ！恐れなくてみんなの為に／
愛と勇気だけが友達さ

嗚呼アンパンマン優しい君は／
行け！皆の夢守る為

③ 時は早く過ぎる 光る星は消える／
だから君は行くんだ微笑んで
そうだ！嬉しいんだ生きる喜び／
たとえどんな敵が相手でも
嗚呼アンパンマン優しい君は／
行け！皆の夢守る為

※テレビ放送等
では、歌詞2番が
使用されている



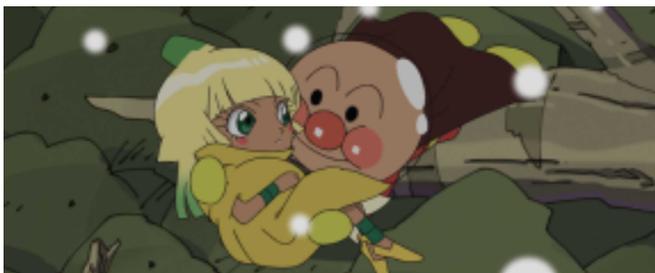
さて皆さんはアンパンマンをご存じだと思います(!?)。アンパンマンで示されている愛は、男女間の情愛を語る愛からもっと離れてきます。聖書の愛に近い、と言える



かも知れません。アンパンマンは子どもたちの大好きなアニメの主人公ですが、その主題歌がなかなか素晴らしい。子どもたちが好きなだけでなく、大人にも愛されているアニメソングの一つです。東北大震災の被災地で、避難所に収容された子どもたちが震災の恐怖と疲れで泣き止まないで、しかたなく、アンパンマンの歌を避難所の放送で流したそうです。するとその音楽が鳴ると同時に、子どもたちは泣き止んでしまったそうです。それだけだったらあり得るかなとも思うのですが、しばらくすると大人たちが泣き出したというのです。大人たち、とくに震災被害で途方に暮れていた大人たちにとっては、胸につまされる、胸に迫ってくる歌詞だったのですね。ちょっと歌詞を紹介してみましようか。子ども向けアニメ「それゆけアンパンマン」の主題歌「アンパンマンのマーチ」です（左記を紹介）。

長らくアンパンマンのキャラクターは、イエス・キリストをモデルにしていると言われてきました(そして今も一部でそのように言われ続けています)。2013年に惜しまれつつもこの世を去った『アンパンマン』の原作者やなせたかし氏が、実は、聖公会のクリスチャンで、洗礼名を『バルトロマイ』というのだ、と伝えられていました。考えてみれば、空腹な人々に自分の顔を分け与えるアンパンマンは、最後の晩餐においてパンを「自分の肉」として分け与えたイエス・キリストと同様のものを感じさせます。この国民的人気ヒーローには、キリスト教の博愛精神が根底にあったのだ、と皆納得してしまっただのです。

やなせたかし氏がクリスチャンだということは、彼の生前から言われていたのですが、本人もそれに頓着せず否定もしないでいたものですから、ずっとそう思われていたのですが、〔2011年にやなせ



氏が生前葬をするというので、戒名まで用意したことや(生前葬は東北大震災の発生により中止)、東京新聞が2013年10月16日号の訃報記事でやなせ氏をクリスチャンであったと報道しながら、後に同年11月20号に訂正記事を掲載したことなどもあって〕死後、実はやなせ氏はクリスチャンではない、ということになりまして、今や「やなせたかしクリスチャン説」は都市伝説の一つということにされております。

やなせたかし氏がクリスチャンであるかどうか曖昧になってしまいました。しかしそのことによって、アンパンマンをキリスト教の枠から引き離して考えることができます。アニメで描かれるアンパンマンの愛は、おなか为空いて泣いている子供に自分の顔をちぎってあげてしまうような犠牲的精神の中に表されます。またアンパンマンの愛には、悪と戦う勇気が加わります。ですから、やなせたかし氏がクリスチャンであったかどうかは別と致しましても、アンパンマンの愛と犠牲と勇気は、キリストの愛の業と共鳴してくることもまた確かなことなのです。

では、聖書における愛を見てみましょう。興味深いのは、キリストの犠牲によって「愛がわかった」という表現が出てくることです。

「わかった」ということは、それまでは「わからなかった」ということを意味します。この様な愛の発見の契機をヨハネの手紙は示します。まずヨハネの手紙一 3 章 16 節。手紙の著者は、愛が分かった瞬間を自覚しています。新改訳改訂第 3 版の翻訳でお読みします。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私



たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」キリスト

がわたしたちのためにご自分の命を捨てられました。「そこに愛が見えるでしょうか。」それは決定的に大切なことです。「神がわたしを愛しておられる。」何にも代えられない大切なメッセージです。この愛の自覚が、「兄弟のために、いのちを捨てる」と表現される人への愛へと展開するのは必然なのです。①愛

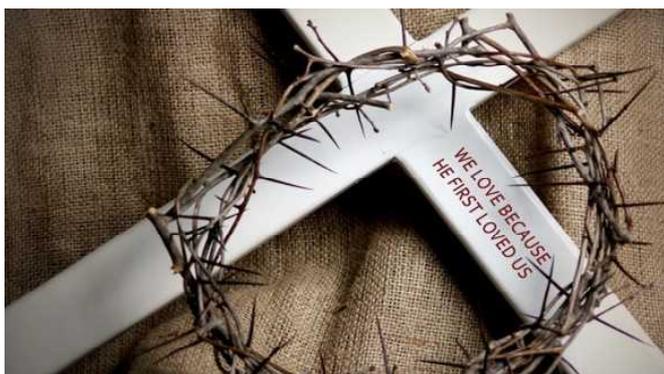
は根源的には神との繋がりをもっているのです〔人を愛するという倫理的レベルはその展開なのです〕。②愛とは神が人間の存在自体を「愛する者」として肯定する所に起源を持っているのです。また③愛はつねに最も大切なもの(命)を与えるという形で表現されます。同じヨハネの手紙一 4 章 10 - 19 節も少し途中を省略しながら、お読みします(新改訳)。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。いまだかつて、だれも神

を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。……私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいるものは神の



うちにおり、神もその人のうちにおられます。…愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。…私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」



神の愛がすべての出発点です。そして神への愛は人への愛へと拡大します。

さてパウロにまいりましょう。コリントの「愛の章」を今日は3節まで学びます。お読みします。

13:1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。13:2たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

パウロはここで、「愛がなければ…」という言葉をも3回繰り返しています。異言を語る特別な霊的能力を持っていても、「愛がなければ…」空しいのです。異言というのは——先々週の礼拝でもお話ししましたが——通常の言語からすれば意味不明ですが、超自然的な言語で神のメッセージを伝える言葉の現象およびその言語に関する知識のことを指します。その異言が「人々の異言」であれ「天使たちの異言」であれ「愛がなければ」、騒がしいどらや、やかましいシンバルに等しいのです。そのどらやシンバルが有効となるのは、愛のハーモニーの中で演奏される時なのです。つまり霊的能力の有効性を保証するのは「愛」なのです。現代のキリスト教の中にも、異言を強調するグループが存在します。彼らはよく、異言を語らない教会は神の霊に満たされていないと批判します。この批判が根本的に間違っているのは、批判に愛が欠落しているからです。



愛が欠落しているのです。異言を語らない教会の個性が認められないのです。靈的能力よりも愛が先行しなければなりません。愛のない異言は、教会や人々に宗教の豊かさよりも混乱と宗教不信をもたらすのです。パウロは靈的能力における愛の不可欠性を訴えます。

次にパウロは、預言と神秘と知識と信仰といった宗教的特性においても愛が不可欠であることを説きます(v.2)。預言の賜物を持ち、あらゆる神秘(μυστήρια)と知識に精通し、山を動かすほどの完全な信仰をもつ時、人は、謙虚でいることが難しくなります。特別な靈的賜物は人を高ぶらせやすいのです。そして愛のない預言は、偽りの権威をもってどれほど人をまどわし、人生を破壊してきたでしょうか。神の神秘を理論によってとらえたと自負する愛のない神学が、純粹な信仰をどれほど傷つけ



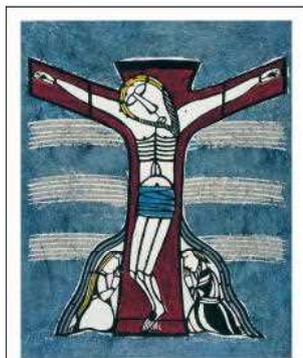
てきたことでしょうか。また、愛のない知識は、戦争においてどれほど破壊的な武力や軍事力に変形されたでし

ようか。また、愛のない信仰は、どれほど宗教間に争いを引き起こしてきたでしょうか。預言であれ、神秘であれ、知識であれ、信仰であれ、いかなる宗教的卓越性も「愛がなければ」「無に等しい」とパウロは言います。

さらにパウロは、倫理的特性をあらわす慈善における愛の不可欠性を説きます(v.3)。全財産を貧しい人々のために使い尽くしたとしても、たとえ、わが身を死に引き渡すというほどの献身——命を与えるという究極の慈善の形(or 究極の愛の形)——であっても、愛がなければ無益だとパウロは言います。愛のない売名的な慈善行為が、人々にどれほど偽りの希望を与え、事情が変われば、あっさり人を捨て去り、結果として、人々を人間不信に追い込んできたでしょうか。どれほど自己犠牲的な慈善行為であれ、愛がなければ、「何の益もない」のです。

さて——ここで少し脇道にそれますが——パウロの論法でいけば、キリストの十字架でさえ、もし愛がなければ無益ということになります。しかしパウロには、十字架に無益でないものが見えてい

たのです。彼は、十字架に神の愛を見ていたのです。そこに愛を見出すのでなければ、見えるのは、宗教的情熱の果てに反ローマの革命分子として死んでいった悲劇の



渡辺禎雄「十字架上のキリスト」

ヒーローの姿だけです。十字架はイエスの宗教活動の失敗の産物ではありません。十字架は、神の知恵であり、神の愛の結晶な

のです。わたしたちは十字架上に神の愛を見ているでしょうか。

どこかで、わたしたちは愛を考えるとき、13章の直前の言葉を忘れないように注意したいと思います。12章31節の言葉です。

1コリ12:31 **あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。**

パウロは、12章で聖霊の賜物を

列挙した後で、「**もっと大きな賜物**」を求めるように勧めたのでした。つまり愛は賜物なのです。神が与えてくださる賜物なのです。まず愛が賜物であることを忘れてはならないのです。愛が聖霊の賜物であり、聖霊の賜物の中でも最高の賜物であるとき、人間の資質や力とは別の所にその源があることを知らなければなりません。神を知り、神の愛を知るとき、神を「父よ」と呼ぶその思いの中に、真の愛は育ち始めます。精神修養の結果、人を愛する立派な人になるのではないのです。また、わたしたちは人を愛せない自分の弱さを知っています。しかしパウロはその弱さを修養によって克服せよ、とは言わないのです。彼は「自分の弱さを誇る」と言いました。その弱さに神の恵みが現れるためです。

イエス・キリストの愛といのちに生かされるようになるとき、わたしたちは人間的弱さから自由にされ、さらには強さからも自由にされ、時には、逆転現象が起るのです。人間の弱さのなかに（こそ）神の力が働くという逆説です。肉体のトゲを抱えていたパウロが癒されることを三度も神に祈ったけ



れど、その祈りは聴かれませんでした。その代わりに、神からの語りかけを聞きました。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのである」と。そこで続けてパウロはこう言います。「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」(コリントの信徒への手紙二12:9-10)。実に、驚くべき、強さと弱さの逆説です。キリストが中心軸となる時、わたしたちの生と死の様は変えられてゆきます。自分自身が中心軸になって努力するとき、どれだけ真面目な動機で真剣に生きていても、所詮、自分自身をがんじがらめに縛る律法主義にすぎないことを、パウロはキリストに出会うことによって発見したのです。また、かつてのパウロは自分だけを正し



い者として、他の人々を裁いていました。しかし、イエス・キリストの愛に結ばれ、イエスの命に生かされるようになる時、自分が頑張らなければ、自分が、自分が…という自縄自縛から解放されるのです。パウロは「イエスの命がこの体に現れるために」(IIコリ4:10)とか、「死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために」(4:11)と繰り返し語っています。精神修養をして、その結果、内面的な輝きが外に現れてくるというのではないのです。精神修養の価値を否定するのではありませんが、その点では、徹底して努力したパウロ自身がそこには答えはない、むしろ落とし穴があるということです。そうではなく、イエス・キリストの愛に結ばれて、それにより自分が新たにされてゆくことこそが重要である、と語りかけます。コリントの信徒への手紙二の4章16節のあの有名な言葉に、目を留めましょう。「たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにきれていきます。」日々努力して自己革新を遂げるというのではなく、「新たに

されていく」のです。受身です。信仰生活は他の誰にも代わってもらえない、自分自身の信仰の生活として、きわめて主体的なものです。その中味は根本的には受身的なのです。ですからパウロは、次のようにすら言います。「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラ3:20)。キリストを信じ、神を信じ委ねることです。そのことにより、日々新たにされてゆくのです。ですから、日々聖書の言葉を味わい、祈りの生活をするということ、主日の礼拝に与ることは、日々新たにされるために大切なことです。

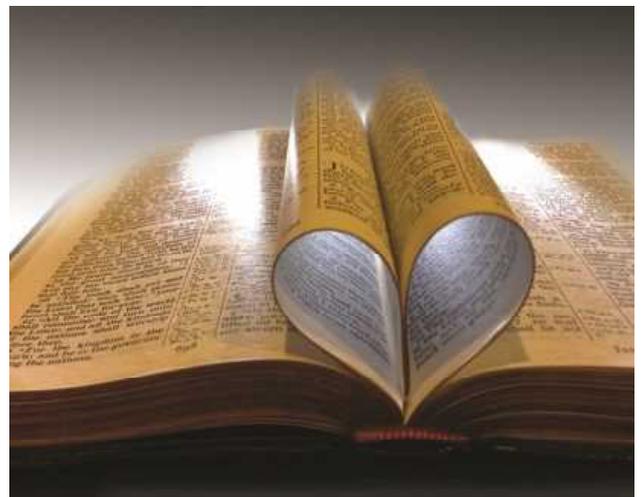
愛はその人間の資質によらず、聖書によれば「神から出るもの」なのです。ヨハネの手紙一の4章7節でこう言われます。「愛する者たち、互いに愛し合きましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。」

教会の豊かさは、さまざまな賜物に愛をかけ算することによって、確保されます。異言の賜物が

あり、預言の賜物があり、神秘が理解され、知識があり、信仰があり、献身的な慈善行為がある。これらが愛によって用いられ、また、なされる時、教会はますます豊かになるのです。(異言+預言+神秘+知識+信仰+献身的慈善行為)×愛=(イコール)教会の豊かさなのです。愛がなければ、(異言+預言+神秘+知識+信仰+献身的慈善行為)×0=(イコール)0なのです。いくら賜物を誇り競い合っても無に等しいのです。

パウロはこう言いました。「キリスト・イエスにあっては……愛によって働く信仰だけが大事なのです」(ガラ5:6)。新しい一週間も、主の愛を信じ、主に助けられまた守られて歩んでまいりましょう。祈ります。

2019.3.24 日本基督教団千歳丘教会



13:1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。

13:2 たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。

13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

13:1 Ἐὰν ταῖς γλώσσαις τῶν ἀνθρώπων λαλῶ καὶ τῶν ἀγγέλων, ἀγάπην δὲ μὴ ἔχω, γέγονα χαλκὸς ἢ ἡχῶν ἢ κύμβαλον ἀλαλάζον.

13:2 καὶ ἐὰν ἔχω προφητείαν καὶ εἰδῶ τὰ μυστήρια πάντα καὶ πᾶσαν τὴν γνῶσιν καὶ ἐὰν ἔχω πᾶσαν τὴν πίστιν ὥστε ὄρη μεθιστάναι, ἀγάπην δὲ μὴ ἔχω, οὐθέν εἰμι.

13:3 κὰν ψωμίσω πάντα τὰ ὑπάρχοντά μου καὶ ἐὰν παραδῶ τὸ σῶμά μου ἵνα καυχῆσωμαι, ἀγάπην δὲ μὴ ἔχω, οὐδὲν ὠφελοῦμαι.